

鮭をつなぐ、町をつなぐ。

斜里町の海と人の暮らしを、長く支えてきたサケ。海も魚も、漁のあり方も変わりゆく今、それでもサケを獲り続ける人たちがいます。受け継いできた仕事への誇り、変化に向き合う知恵、そして次の世代へ残したいもの。二組の漁師を訪ね、サケとともに歩んできた物語をたどります。



海は変えられない、

それでも漁師は網を入れる

Profile

知床漁業生産組合 代表理事組合長
のがみ ひでと
野上 英人さん

最近入った若い人たちは、その光景を見ていない」と話す。

魚だけでなく、海や漁の風景も変わった。「水温は気温ほど極端に変わっているわけではないかもしれないが、1度変われば魚には大きな影響がある」と野上さんは話す。そして漁の現場では、人力で行っていた作業をショベルやクレーンなどの機械が担うようになった。

魚も、海も、そして漁の方法も。野上さんが長年見てきた知床の漁業は、大きく姿を変えている。

それでも、サケを獲る

変わり続ける海の中で、それでも野上さんたちはサケを獲り続ける。サケは町全体の水揚げの約9割を占め、長くこの町の漁業を支えてきた魚だ。かつてはホタテ養殖にも挑戦したが、ウ



トロ沖は水深が深く、面積も限られるため採算が取れず20年以上前に撤退したという。海の変化に合わせて漁のあり方が変わっても、サケは今も漁師たちの仕事の中心にある。

一方で、サケを獲り続けるには、サケが帰ってこられる環境を守ることにも欠かせない。サケは川で生まれ、海で数年間過ごした後、生まれた川へ戻って産卵する。そこで遡上するサケが少ないときには、定置網の一部を一時的に揚げ、川へ上りやすくする取り組みが行われている。

また、漁獲金額の一部をふ化放流費用として負担する取り組みも続けている。

「海は変えられない。やることをやって網を入れるしかない。これからのことは魚にきかんとわからん」

海の変化を受け止めながら、できることをする。獲ること、帰ってこられる環境を守ること。その両方を考えながら野上さんは漁を続けている。

サケが獲れる海を、次の世代へ

「漁師がかっこいいと思ったことはない」と飾らずに、どこか照れくさそうに話す野上さん。しかし、漁師として仕事を覚える中で「できる人だな」と感じる先輩がいた。魚を揚げるときの手さばきや操船を見ながら、自分の技術を磨いていった。

漁師になることが、
当たり前だった

野上さんが漁師になったのは18歳のとき。もつと前から、漁師の仕事は身近にあった。小学校6年生の頃には、祖父が行っていた定置網漁の荷揚げを手伝い、夏休みには番屋へ遊びに行った。同じくらの年の子どもたちもいて、当時はサケやマスがたくさん獲れていたという。祖父も父も漁師。高校時代にも漁の手伝いをするなど、幼い頃から漁師の仕事を見て育った野上さんにとって、漁師になることは特別な決断というより、自然な流れだった。

18歳で漁師の世界に入り、44年。今とは違う海の姿も記憶に残っている。当時は9月に網を入れてもほとんど獲れず、10月後半になってようやくサケが見え始め、11月にピークを迎える。サケを獲るために、漁の時期ぎりぎりまで船を出していた。今なら網を壊すリスクを考えて出航を見合わせるような時化でも、当時はサケを獲るために海に出ていたという。

「当時は、よく獲れた。網にびっちり入るんだよ。1日に2、3回網揚げに行くこともあった」

海の厳しさも、漁師の仕事も、身近な大人たちの姿から覚えていった。その延長線上に、野上さんの44年の漁師人生がある。



漁の安全と大漁を願い、漁師たちを見守る神棚。

「この人の仕事がかっこいいと思ったら、そういう人にばかりついていたい」

今は若い漁師に「聞いた方が早いぞ」と声をかける。自分が先輩の仕事を見て、聞いて、覚えてきたからこそ、今度は若い世代の背中を押す。

野上さんにとって、サケ漁を続けることは仕事を続けることそのものでもある。

「サケ漁をやめるときは漁師をやめるとき。でも若いやつらがいるからやめられない」

その言葉には、自分のためだけではなく、若い人たちに漁師の仕事をつないでいきたいという思いが込められている。サケを獲る人がいて、サケが帰ってくる海がある。そして、次の世代も漁師として働ける。

「サケが獲れる環境を残したい」
44年、海と向き合ってきた野上さんは、そのために今できることを続けている。

魚も、海も、漁も変わった

40年以上、知床の海で漁を続けてきた野上さんが「一番変わった」と感じるのは、魚種だという。かつて春の定置網漁で主力だったのはホッケ。ブリはほとんど入らず、たまに獲れば賄いで食べるような魚だった。それが今では、まとまって獲れるのが当たり前になった。「ブリなんて昔は珍しかった。入ることもなかったのに、今は何トンも獲れる」。近年はフグも多く見られるようになったという。

一方で、かつて当たり前だった魚は姿を消した。「カラフトマスは完全にいなくなった」。十数年前まで、ルシヤの番屋に漁師が泊まり込み、1日に3回網を起こしていた。網いっぱいにカラフトマスが入る光景を知る野上さんにとって、その変化は大きい。「ここ



海のこと、サケ漁のこと。昔を思い出しながら懐かしそうに語る野上さん。

水産 Information

「知床鮭」のロゴができました！



ロゴマークの一例

知床半島周辺でとれたサケに使用いただけるロゴマークができました。知床のサケの価値を高めるために作成したもので、斜里町・羅臼町・標津町でご希望の方にデータ配布しています（使用自体は無料です）。詳細については水産係までお問合せください。

図 水産林務課 水産係 ☎ 0152-26-8374

活用いただける使用例



知床鮭を使った商品のパッケージ



知床鮭を使った食事のメニュー表



店内で着るスタッフTシャツ

※無料のPR物であればOK



つながった漁師の仕事を、
その先へ

Profile

斜里第一漁協青年部 部長
有限会社豊慶漁業部
代表取締役
ばば かつよし
馬場 康輔さん(左)

有限会社豊慶漁業部
代表取締役
ばば かつよし
馬場 勝義さん(右)



たまに後ろ姿を間違えられるくらい似てきた、親子の背中。

る魚の顔ぶれが変わったと感じているという。

「最近ではブリやマグロなど、これまで見られなかった魚が網に入るようになった」

これまでの経験だけでは先を読めない。そんな海の変化に向き合うため、漁師の仕事にも新しい工夫を取り入れている。獲った魚を自分たちで加工・販売したり、サケを活締めにして品質を高めたり。

目指すのは、単純に漁獲量を増やすことではない。「量が少なくなった魚の一匹一匹の価値を上げたい」

海が変われば、漁師の仕事も変わる。これまでのやり方を守るだけでなく、新しい方法を試しながら、漁師としてこれからも海と向き合っていく。

サケを、次の世代につなぐ

漁師が使う道具のひとつにマキリというものがある。網やロープを切るための刃物で、船上では必ず腰に下げる。このマキリの鞘、勝義さんは18歳から同じものを使っているという。父親が亡くなった後に家で見つけた手作りのもの。今も壊れることなく、勝義さんの腰にある。船上で肌身離さず持つマキリを守る鞘は、まるでお守りのような存在だ。

父から仕事を受け継ぎ、長く海と向

漁師になった理由は、
それぞれ違う

同じ海で働く父・勝義さんと息子・康輔さん。けれど、漁師になるまでの道のりは、それぞれ違った。勝義さんが漁師になるきっかけは、高校1年生のときに漁師である父親を病気で亡くしたことだった。

「親父が亡くなった時点で、俺の就職先が決まったような部分もある」

そう語る勝義さんだが、子どもの頃から漁師の仕事を身近に感じていて「漁師になるのもありかな」と漠然と考えていたという。

一方、康輔さんは高校3年生の夏頃まで進学を考えていた。父である勝義さんからは、「大学行くなら漁師はさせない」と言われていた。漁師になるなら、仕事を覚えるのが早い若いうちがいいという考えからだ。そして康輔さんは夏期講習をきっかけに進路を考え直し、「じゃあ漁師やろう」という感覚で漁師の道を選んだ。

親子でも、漁師という仕事との接点は違っていた。勝義さんの子ども時代には、夏になると父親の番屋へ行って遊ぶことがあった。時代が変わり安全面への配慮から、康輔さんの頃には子どもが番屋に行くことはなくなったという。

身近に仕事を見て育った父と、仕事との接点がほとんどなかった息子。それぞれの道のりを経て、二人は今、同じ海で働いている。

き合ってきた勝義さんはこれからのサケ漁についてこう話す。

「最近思うのは、森とか川が大事なんじゃないかって。サケの遡上がよくないこともあるし、回り回って影響しているかもって思うんだよね。川なら、漁師の自分らになんかできることがまだあるんじゃないかって。本当に川が原因かどうかかわかんないし、何ができるかはまだわからないけどね」

漁師として10年を歩んできた康輔さん。漁師の仕事は毎年同じことを繰り返す。けれど、その作業は一年に一度、10年かけて、ようやく仕事を覚えてきたという。

「後輩に聞かれたときになんでもすぐ答えられる漁師になりたいかな」

頼られたときに応えられる漁師へ。一年に一度の作業を積み重ねながら、康輔さんもまた、次の世代へつながる仕事を身につけている。

同じ海で働く、親子

親子で同じ仕事をしているからこそ、職場では同じ場所で作業しないように意識して距離を置いている。仕事上の指示も、基本的にほかの先輩が出す。親子だからこそ、仕事では「親子」ではなく、それぞれ一人の漁師として向き合う。その距離感が、康輔さんにとって働きやすさにもつながっている。

そもそも、二人は性格も違う。互いの違いを尋ねると、康輔さんは「俺は割とおおざっぱな性格。親父は意外と細かいから、そこは全然違う。あと器用さ」と話す。すると勝義さんがすかさず、「A型とO型の違いだよ」と笑った。

そんな二人が大切にしているのが、安全への意識だ。漁師の仕事には常に



「俺が30代のころは、ほかの漁師とよく喧嘩してたな」と笑う勝義さん。対照的に、今年30歳の康輔さんは穏やかな雰囲気。

水産 Information

今年も「知床鮭ウィーク」開催！

今年も10月1日(木)～10日(土)の10日間で知床鮭ウィークを開催します。期間中は町内の食堂やレストランで知床鮭のメニューが登場！ウトロ鮭テラスではサケの水揚げが見学できます。ペレク川や斜里川など身近な場所でもサケの遡上を見ることができるので、「鮭、日本一のまち」で秋鮭シーズンを楽しみましょう！

※サケの遡上を見学する際は、ヒグマや車に注意のうえ、安全に見学しましょう。



詳細はこちら

